

## 2024年4月7日復活節第2主日説教

旧約聖書 イザヤ26章2-9、19節

使徒書 使徒言行録3章12a、13-15、17-26節

福音書 ヨハネによる福音書20章19-31節

本日の旧約日課は、先週の続きです。1節と10節から18節が省略されていますので、少し内容が分かりにくいのですが、前回の「主の山における祝宴」という小見出しに示されていた、ユダ王国・イスラエルの回復への希望は、継続されています。また、省略されている箇所ですが、12節には「主よ、あなたは私たちに平和を備えてくださいます。あなたは私たちのためにすべての業を、成し遂げてくださいました」と主なる神様の与える「平和」についての言及があります。また19節には「あなたの死者は生き返り私の屍は立ち上がります。塵の中に住む者よ、目覚めよ、喜び歌え。あなたの露は光の露地は死者の霊に命を与えます」と、復活を想起させる文言もあります。イザヤ書のこの箇所が示す回復への希望とは、「平和」と「復活」とが結びついているのです。

「平和」と「復活」とが結びついていると申しましても、わたしたちの主イエス・キリストを通じた信仰とは、厳密には異なります。ここで「平和」と「復活」が結び付けられているのは、バビロン捕囚を招いた不信仰や不正義への反省があり、その崩壊からの民族的・集団的に復興するという意味での「平和と復活」でしょう。しかし、5節から7節にある「主は高い所に住む者たちを引き下ろし、そびえ立つ町を低める。それを地まで低くし、投げつけて塵とされる。足がそれを踏みつける。貧しい者の足と弱い者の歩みが。正しき人の道は平坦であり、正しき人の道筋を、あなたはまっすぐにされます」という箇所にある言葉は、イエス様の働きを思い起こさせます。すなわち、イザヤ書が示していた、未来に起こると語っていた、バビロン捕囚からの回復は、形を変えて、500年近い時を超えて、イエス様の登場によって実現したといえるのです。それゆえに、わたしたちにとっては、「平和も復活」もイエス様と切り離しては考えられないのです。

そのような前提で、本日の福音書を見てみますと、前半の物語が示していることは、イエス様が教える「平和」とは何かということです。ここでの物語は、ヨハネ福音書独自のお話です。イエス様を見捨てて逃げた弟子たちは、エルサレム近郊を離れず、しかし、自分たちは捕まらないように、家に鍵をかけていました。家に鍵をかけるのは、最低限の自衛手段といえます。それゆえに、互いに鍵をかけあい、お互いの領域を踏み込まないようにしている状態が平和といえます。しかし、イエス様は、鍵がかかっているにもかかわらず、「そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた」

(ヨハネ20:19)と弟子たちの前に現れました。すなわち、鍵があることではなく、それが無いような状態こそが真の平和であると示されたのです。もちろん、これはあくまで理想であって、すぐに現実化、具体化できることではありません。鍵をかけない状態が、問題を引き起こしたり、鍵の均衡がとれている状態の平和を壊したりしてしまう場合もあります。もちろん、いまでも、ご近所同士で家に鍵などかけないというのどかな地方もあるかもしれません。あるいは逆にあまりに治安が悪すぎるので、鍵などかけても何も防げないという地域もあるかもしれません。しかし、イエス様の示す平和は、理想ではありますが、『聖書』が示す真の平和です。

この平和の実現の妨げとなってしまう事柄の関連するのが、続くトマスの物語です。ディディモと呼ばれたトマスは、イスカリオテのユダと同じく、毎年この時期、「疑いのトマス」と全世界で話題となってしまうかわいそうな人ですが、彼は、復活に対する疑問と勘違いを示します。トマスは、死んだ人間が生き返るわけではない。だから、もし生き返ったとしたら、傷跡があるかどうか確かめなければ信じないと思ったのです。おかしな話ですが、本当に死んだ証拠があれば、信じようということです。

トマスが信じることができなかつたのは、イエス様の復活、言い換えれば死者の復活です。しかし、それは今の命が終わったら、それですべてが終わりであると考えていることを示します。そのような考えと平和と結びつけるならば、トマスにとって、今の命を、大切にするために、それを全に守ることが平和にほかならないのです。それゆえに、その先にある永遠のいのちを生きることに、そこに本当の平和があること、あるいはその本当の平和を希望とする歩みに気が付かなかつたのです。

イエス様は、疑うトマスに対して、「**あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。あなたの手を伸ばして、私の脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい**」(ヨハネ 20:27) と語り、死んだ証拠を示そうとします。トマスも、「**『私の主、私の神よ』と言った**」(ヨハネ 20:28) とありますので、すぐに大切なことに気が付いたのです。今の地上の命を守り続けることに希望があるのではなく、イエス様の復活を信じることを通して得られる永遠のいのち、そこに希望を持つことの大切さです。ことにヨハネ福音書は、そのことに気づき信仰に入った人は、すでに今歩んでいる命が、永遠のいのちに変えられている。だからこそ、今地上の命を歩んでいても何の心配もないことを示しています。これはヨハネ福音書独自の示し方です。

わたしたちは先週の復活日に、改めてその基となるイエス様の復活について、ご一緒に確認しお祝いしました。ことに、わたしたちの大切な聖堂の大規模改修の終了の感謝とともにそれを行いました。しかし、大切なことは、本日の福音書の物語で、イエス様が「**あなたがたに平和があるように**」と三回も語っていることです。そして、その真ん中二回目の箇所で、「**イエスは重ねて言われた。『あなたがたに平和があるように。父が私をお遣わしになったように、私もあなたがたを遣わす』**」(ヨハネ 20:21) と語っていることです。復活を信じることは、各自一人ひとりの恵みであり喜びありかけがえのない宝です。しかし、それが与えられることを共に確認し、祝う教会から、イエス様が「遣わす(送る)」と語っている通り、わたしたちは、教会からそれぞれの場所に遣わされる(送られる)のです。そこにおいて復活の命を信じるとは、どういうことであるのか、そこに希望があるとはどういうことかを、証しする使命があるのです。

今も、わたしたちは、いまだ暴力や戦いがやまない世界に生きています。鍵をかけないことが真の平和ですと語ったとしても、そう語ることが、戦いを引き起こす、あるいは戦いを激しくしてしまうかもしれません。しかし、だからこそ、今戦いの中にない教会が、そしてそこから遣わされるわたしたちが、真の平和に希望を持つことが、どれほど素晴らしいかを示すことが大切なのです。これからもわたしたちの東京聖三一教会に与えられた、聖堂をはじめとしたさまざまな宝を用いて、礼拝から始まる真の平和を、世界に示す歩みを、より深めていきたいと思えます。